SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

中古における文字と文体

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 勝山, 幸人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000456

中古における文字と文体

勝山幸人

一

恵心院の学僧源信（九四二―一〇一七）は、その著『往生要集』において、念仏による極楽往生への道を、「道俗貴賤」の人々に興味深くまた解り易く説いた。寛和元年（九八四）、時に源信四十二歳の時である。多くの経典の要文を随所に鏤めた本書は正確な漢文で書かれた日本浄土教の根本経典だが、そのまま唱誦される他の経典とは異なり、意味を押さえながら、日本語の文章として訓読していたものと思われる。

本稿でこの『往生要集』を取り上げる理由は、その本文史の特殊性にある。すなわち、正確な漢文で書かれた本書は、後に漢文で書き写されることは固より、全体を平仮名や片仮名を使って書いたり、聞書きや絵を伴ったりするなど、実に様々な形態となって伝えられているのであって、この文字の改編が、単に使用する文字を変えた表記上だけの問題に止まるのか、あるいはそこに、文体そのものの変容と何か関係があるのかといった点に関心が向けられるからである。

二

『往生要集』完成後、程なく書写された伝本は、漢文を中心に、何点か現存している。特に興味を引くものは、形態の異なる次の四点、すなわち、漢文の『往生要集』に精密な訓点の施された最明寺本、漢字片仮名交じり文として興福寺に伝わる写本、そして、全体を平仮名で書き記している高野山西南院と京都は浄福寺が所蔵する伝本とである。

○最明寺本の「最明寺」とは、神奈川県大井町にある古刹で、ここに蔵する『往生要集』は、上中下巻すべて揃った漢文書きの完本である。築島裕・坂詰力治・後藤剛の三氏が、影印と訳文を公刊しており[1]、それによれば、平安時代後期と思われる朱点、及び鎌倉頃の墨点が施されており、十一世紀後半の貴重な漢文訓読語資料と位置づけられている。本稿では、その訓読文を同書『譯文篇』に基づいて、平安後期の朱点のみを調査対象とした。

○興福寺本は、鎌倉時代初中期頃の写本一帖で、巻下末の一部分を残している。片仮名を主体とした漢字片仮名交じり文であって、誤字・衍字・誤写などによる訂正、あるいは「みせ消ち」や欠損部が随所にあり、また漢字にはルビがなく、一言で言って読みにくい本文である。東京大学史料編纂所がマイクロフィルムを持っているが、本稿では、鈴木一男が『初期点本論攷』に収めている『興福寺本往生要集』の翻刻した本文に従った[2]。

○一方、全体が平仮名で書かれている高野山西南院に伝わる写本は、『往生要集』の完成した寛和元年（九八四）以降、治承五年（一一八一）以前の、それほど遡らない頃の書写、『三十帖策子目録紙背』に残る断簡十一枚である。『往生要集』全体の一割にも満たない残存状況ながら、本書完成後の、最も古い平仮名資料として、極めて重要なものと言ってよい。『往

生要集』の書写と直接に関係があるかどうかは不明だが、その表面の目録には、

治承五年丑二月廿二日於嵯峨水本僧房／書写了／金剛仏子静幸

と言った奥書がある。本稿では、静岡大学大学院生ゼミで作成した本文を使用したが[3]、頁行数の付け方については、西崎享の『高野山西南院蔵『往生要集』断簡』に拠った[4]。

○もう一つ、京都浄福寺の『往生要集』も漢字平仮名交じりの写本である。鎌倉時代、京極摂政良経（一一六九―一二〇六）の筆と伝えられるが、巻下を欠く、巻上中だけが現存している。本文は、

宝積経（ホウシヤクキヤウ）の偈（ケ）にいはく・種々（シユく）の悪業（アクコウ）をもてたからものを・もとめて・さいしをやしなひて歓娯（クワムコ）せんとおもふ

のように、漢字には片仮名でルビを付け、読点も付けるなど、一見して読者を想定した読み易い形態になっていることがわかる。西田直樹・西田直敏によって影印・翻刻が出され[5]、全貌を知ることができるが、巻下末の一部分しか残さない興福寺本との比較が不可能であることから、浄福寺本については両氏の論攷に譲り、ここでは参考程度に止めたい。

さて、本稿では形態の異なる最明寺本・興福寺本・西南院本三点の『往生要集』について、書写に係る文字の改編と文体の関わりを論ずべく、以下に本文の語彙や表現などを比較してみようと思うのだが、現存する部分が互いに重なり合っている所は、巻下の末尾一部分に過ぎない。西南院本の当該行数と合わせて詳しく示すと、

大文第十問答料簡　第四尋常の念相　13行分
大文第十問答料簡　第五臨終の念相　46行分
大文第十問答料簡　第六麁心の妙果　7行分
大文第十問答料簡　第七諸行の勝劣　2行分
大文第十問答料簡　第九助道の資縁　9行分

大文第十問答料簡　第十助道の人法　12行分

の、僅か八十九行分に止まる。例えば「大文第十問答料簡　第六麁心の妙果」の第九以下について『岩波日本思想大系源信』は次のような漢文を載せている。(6)

第九、助道資縁者、問、凡夫行人、要須衣食、此雖小縁、能弁大事、裸餧不安、道法焉在、答、行者有二、謂在家出家、其在家人、家業自由、飡飯衣服、何妨念仏、如木槵経瑠璃王行、其出家人亦有三類、若上根者、草座鹿皮、一菜一菓、如雪山大士是也、若中根者、常乞食糞掃衣、若下根者、檀越嚫施、（四〇二頁下19―四〇三頁上2）

これを最明寺本・興福寺本・西南院本はどう書写しているだろうか。

〔最明寺本〕（訳文）

第九に、助道の資縁者（といふは）、問（ふ）、凡夫の行人は要す衣食を須（ゐ）る。此れ小縁なり（と）雖（も）、能く大事を弁す。裸（ハダカ）ニ餧（ウエ）テ安らか（なら）不は、道法焉ソ在らむ。答（ふ）、行者に二有（り）。謂く、在家と出家となり。其の在家の人は、家業、自由なり。飡、飯・衣服アリ。何そ念仏を妨（サマタ）けむ。木槵経の瑠璃王の行の如し。其の出家の人に亦三類有（り）。若（し）上根の者（もの）は、草座鹿皮一菜一菓（なり）。雪山の大士の如き、是（なり）〔也〕。若（し）中根の者（もの）は、常（に）乞食糞掃衣なり。若（し）下根の者（もの）は、檀越の嚫施なり。

〔興福寺本〕

第九ニ助道資縁トイハ　問　凡夫行人ハカナラス　衣食ヲモチ（キ）ル　コレ少縁ナリトイヘトモ　ヨク大事ヲ弁ス　裸餧ニシテヤス（ラ）カナラスハ　道法　イツク（ン）ソアラム　答　行者ニフタツアリ　イハク　在家出家ナリ　ソノ在家ノ人ハ　家業ヲノツカラホシキマヽナリ　飡飯衣服アリ　ナンソ念仏ヲサマタケム　木槵経ノ瑠璃王ノ行ノコトキナリ　ソノ出家ノ人ニマタ三類アリ　モシ上根ノモノハ　草座鹿皮　一菜一菓　雪山大士ノコトキコレナリ

モシ　中根ノモノハ　ツネニ乞食糞掃衣ナリ　モシ下根ノモノハ　檀越ノ嚫施ナリ

〔西南院本〕

第九にせめのしやうといふはとふほんふの行人にきものくひものをもちゐるはたかにうへてやすらかならすはいつくにかあらむたふ行しやにふたつありさいけすんけなりそのさいけのひとはいへのことほしきまゝにしてくひものきものありなんそ念仏をさまたけむすけのもとに又みつあり上こむのものはくさのさしゝのかは一のな一のこのみなりせゝむたいしのことときなり中こむのものはつねにこんしきしふんさうえなり下こむのものはたんをんのせなり

西南院本には漢文の「此雖小縁、能弁大事」と「如木槌経瑠璃王行」の二文を欠いているが、興福寺本共に補綴や私意による意訳もなく、概して原文に即応していると言ってよい。ただ、西南院本においては、「すんけ」（出家）「せゝむたいし」（雪山大士）のように、促音を含む漢語を強引に仮名表記したり、「はたかにうへてやすらかならすはいつくにかあらむ」に「道法」の二字がないために意味が通らなかったりするなど、読解には困難さを伴う。また、漢語や仏教語の「助道資縁」を「せめのしやう」、「飡飯衣服」を「きものくひもの」、「一菜一果」を「一のな一のこのみ」、「自由」を「ほしきまゝにして」など、和文語への置き換え例が見られるが、興福寺本にはそれがない。あっても極く僅かな語彙に止まるようである。むしろ、興福寺本の方がよりいっそう漢文体に近いと言うべき様相が認められることがわかる。以下、詳しく述べていきたいと思う。

三

最明寺本・興福寺本・西南院本三点が互いに重なり合う、西南院本本文八十九行分について、それぞれの語彙や表現な

どを対照させたカードを作ってみた。厳密には文でもなければ文節でもない――切り方としては、意味の通る最小のまとまりを適当に採っていったものである。都合二百七十九枚。この中には脱文・異文・欠損・不明などあって、相互に比較できないものを除くと、残りは二百二十五枚となる。以下の考察は、その調査結果を踏まえたものである。

漢字仮名交じり文は、一般に和文体と漢文体の中間に位置づけられているが、そこで興福寺本と西南院本の場合、その文体基調が和文体に偏向するか、漢文体に偏向するかを知るべく、

A　興福寺本と最明寺本が一致し、西南院本が異なるもの

B　西南院本と最明寺本が一致し、興福寺本が異なるもの

C　興福寺本と西南院本が一致し、最明寺本が異なるもの

の観点で分類してみた。結果は次の通りである。

A　興福寺本と最明寺本が一致し、西南院本が異なるもの（全用例）

〔興福寺本〕	〔最明寺本〕	〔西南院本〕			
アカサハ	明さ者	あかすといふは	念相	念相	さうゆ
尋常ノ	尋常の	つねの	臨終	臨終	十念
念相ヲ	念相を	念仏のさうを	惣相	惣相	さう
行住坐臥	行住坐臥	たちゐおきふし	念相間雑スルコト	念相間雑すること	思ひましはること
モハラ	専ら	もんはらに	一心ニ	一心に	心をひとつにして
欣求ス	欣求す	ねかふ	一善	一善	ひとつのせん
称念シ	称念し	念し	阿鼻地獄	阿鼻地獄	むけむちこく
			少火	小火	ちひさきひ

往生スヤ　往生す耶
行　行
坐　坐
時処ニ　時処に
念スル　念する
命終ニ　命終に
諸務ヲ　諸務を
自善根　自善根
自願求ノ因力　自願求の因力
衆聖　衆ー聖
下々品　下々品
ナラノ　何等の
砂礫　沙礫
断壊シヌ　断壊しぬ
成スル　成する
猛利ナル　猛利なる
家業　家業
頭燃　頭燃
衣食　衣食
助道資縁　助道資縁
イツクソ　焉そ
飡飯衣服　飡飯衣服
三類アリ　三類あり
出家ノ人ニ　出家の人に
一菜一果　一菜一果

おほ上す
あるき
ゐたらむに
ところに
念せよ
みやうすのときまて
もろゝのいとなみを
みつからのせむこむ
みつからねかひもとむるちから
もろゝのほとけ菩薩
下品
いかやうに
いさこ
たえぬ
なす
みやうなる
いへのこと
かうへの□
きものくひもの
せめのしやう
いつくにか
きものくひもの
みつあり
すけのもとに
一のな一のこのみ

千里ニイタル　千里に至る
貧人　貧人
劣夫　劣夫
富貴　富貴
堅固　堅固
飛騰　飛騰
魚蜂　魚蜂
栴檀樹　栴檀の樹
出成スル　出成する
羚羊　羚羊
忍辱トス　忍辱と為
堅固ナリトイヘトモ　堅固なりと雖
果実ヲ出生ス　果実を出生す
鹿皮　鹿皮
クタレルトコロ　下れる所
帰スル　帰する
慢心　慢心
善師　善師
帰ス　帰す
険ヲ　険を
モチイル　須ゐる
シカラス　爾ら不
勧励セヨ　勧励せよ
キクコトヲエストモ　聞こと得不とも
受持シ披読シ習学スヘシ　受持し披読し習学す応し
遠方ニ　遠方に

千りをいたる
□つしきひと
いやしきひと
とみゆたかにして
かたしといへとん
とひのほること
うを
千たんのはやし
上する
ひつし
人にくとなつて
かたしといへとん
みをむすふ
しゝのかは
□なるところ
かへる
をこりの心
よきし
かなへり
さかしきを
すへし
しかはむはあらす
はけめ
きかされとも
とほきほうに

B　最明寺本と西南院本が一致し、興福寺本が異なるもの（全用例）

〔興福寺本〕	〔最明寺本〕	〔西南院本〕			
タヽ	但し	たゝし	ナシテ	作て	つくりて
トゝマラス	住ら不て	とゝまらすして	ナホヨク	尚	なを
コトク	如し	ことし	シハラクノアヒタニ	斯須頃に	すゆのあひたに
大因縁	大の因縁	大のいんねん	仏ノゝタマハク	仏の言く	ほとけのいはく
トイハ	トイフハ	といふは	飢ニシテ	飢えて	うへて

C　興福寺本と西南院本が一致し、最明寺本が異なるもの（全用例）

〔興福寺本〕	〔最明寺本〕	〔西南院本〕			
イフトロノ	言ふ所の	いふとろの	タカヒニ	相ひ	たかひに
十念ヲフルニ	十念を経て	十念をふるに	教文ニオイテ	教文にして	けうもんにをいて
最勝ノ行ナリ	最勝なり	さいせうの行なり	一念	一の念	一ねむ
ハラフ	救はむ	はらふ	アシナヘタル	蹔なる	あしなえたる
コトク	如き	ことく			

採取した全てのカード二百二十五枚を一〇〇として、これを各項目の用例数と共に%で表すと、

A　66例　全体の二九・三%

B　10例　全体の四・五%

C　9例　全体の四・〇%

と言うことになる。次に、残りの大半を占める

D　最明寺本、興福寺本、西南院本の三点が一致するもの

E　最明寺本、興福寺本、西南院本の三点とも異なるもの

を同じ要領で示しておきたい。

D　最明寺本、興福寺本、西南院本の三本が一致するもの（一例）

〔興福寺本〕	〔最明寺本〕	〔西南院本〕			
座禅入定シテ	座禅入定して	させんにう丈して	オツル	堕る	おつる
観スルナリ	観するなり	観するなり	スナハチ	即	すなはち
モトムルナリ	求るなり	もとむるなり	猛利ナル	猛利なる	みやうりなる
浄土ヲ	浄土を	上土を	スラ	すら	すら
乃至	乃至	ないし	イハムヤ	況	いわんや
助念	助一念	そねむ	毒ノコトシ	毒の如し	とくのことし
乞食	乞食	こんしき	一切衆生	一切衆生	一切す上
臨終	臨終	りむす	ヤスラカナラスハ	安らか不は	やすらかならすは
億年シテ	憶念して	をく念して	サマタケム	妨げむ	さまたけむ
邪見	邪見	しやけん	不可思議ナリ	不可思議なり	ふかしきなり
サタメテ	定て	さためて	四十由旬	四十由旬	四十ゆすん
悪業	悪業	あくこう	変シテ	変して	へムして
			一端ノモノ	一端の物	いたんのもの
			宿命智ヲウ	宿命智を得	すくみやうちをう

E　最明寺本、興福寺本、西南院本の三本とも異なるもの（全用例）

〔興福寺本〕	〔最明寺本〕	〔西南院本〕			
ハラフテ	排ヒテ	はらふ	イノチヲウルコト無量ナリ	寿得こと無量なり	むろうのいのちをう
船ニ奇戴シヌレハ	船に寄リ戴テ	ふねにやとりけれは	ハラムコトアルコトヲウ	身有こと得	はらむ
貢ス	貢すれは	たてまつるに	ミユレハ	見て	みつれは
盈望シヌ	望みに盈つ	のそみゝつかことし	瑜珞シツレハ	其の身を瑜珞すれは	そのみをかさりつれは
			妙果トイハ	妙果者	めうくわといふハ

念ソヤ　念そ耶　ねんすへきそ　成スルコトヲウヘシ　成ること得へし　なるへし
イキヌ　活く　よみかへる　諸行　往生の業　もろもろの行
香美ナラシム　香美なり　かうはし　ヲノツカラホシキマゝナリ　自由なり　ほしきまゝにして
食シヌレハ　食すれは　くうつれは　自高スレハ　自高するは　たかけれは
奏スレハ　奏するに　きくに　弥陀本願　弥陀の本願　あみたの本月

用例数とその割合は、

D　121例　全体の五三・七％

E　19例　全体の八・五％

である。

四

最も高い数値を示したDは、全体の半数強五三・七％に及ぶ。このことは、興福寺本・西南院本が、片仮名や平仮名という、それぞれ使用する文字に違いはあっても、基本的には漢文体に依存した本文ということになるだろう。また、西南院本では、漢語や仏教語をそのまま平仮名で書き留めた例が多い点にも注目してよいかと思われる。その際、読解に支障を来すほどの強引な仮名表記例があることは、上にも述べた通りである。

次にAについてだが、これも数値的には高い方と言える。Aに挙げた例のうち、

おほ上（往生）　千たん（栴檀）

人にく（忍辱）　上する（成する）

など、普通では考えられない誤字や宛字がある。これは、西南院本に認められる大きな特徴の一つである。[7] また、

「尋常」を「つね」　「行住坐伏」を「たちゐおきふし」　「欣求」を「ねかふ」

「行」を「あるき」　「坐」を「ゐ」　「時処」を「ところ」

「諸務」を「もろゝのいとなみ」　「自願求因力」を「みつからねかひもとむるちから」

「衆聖」を「もろゝのほとけ菩薩」　「念相間雑」を「思ひましはる」

「貧人」を「□つしきひと」　「劣夫」を「いやしきひと」　「飛謄」を「とひのほる」

「果実」を「み」　「堅固」を「かたし」　「衣食」を「きものくひもの」

「家業」を「いへのこと」　「飡飯衣食」を「きものくひもの」　「慢心」を「をこりの心」

など、文脈に適合した正確な訳とは言えない、極めて簡単なものだが、和文語への置き換えがなされているのである。これは、確かに文字の改編に伴う語彙の変更ということにはなるだろう。だが、文体そのものの変容にはなっていないと考えるべきであって、A及びEにおいて少しく認められる、本文の特徴ないしは傾向とみるべき性質のものかと思われる。

西南院本の場合、漢語を音読した際に、その意味が理解しにくかったり出来なかったり、あるいは対立する同音語があって、誤解を生じかねなかったりすることから、それを回避するために部分的に和文語への置き換えがなされたものと思われる。そう考えると、西南院本は、漢文や漢文の書き下し文を書写したり読誦したり、また講述を目的として書き記したりしたものではなく、よく言って「聞書き」、さらに言えば備忘のため、講述中の本文を平仮名を使って走り書きしたものという推測が成り立つことになる。つまり、読者や後に書写されることを想定してはいない一回過程の本文なのである。

因みに、同じ平仮名書きでも浄福寺本は、「訳が正確で、和語と漢語がよく調和した文章になっており」[8]、表記上も、また

言語の面からみても和漢の交混した文体として完成され、漢文の『往生要集』とはまた別の、違ったレベルにおいて、それは一つの文学作品として、多くの読者を期待し、読み伝えられていくべき本文と言えるだろう。

Bでは興福寺本の特徴が解るはずだが、実際には四・五％と極めて低い数値しか示していない。和文語への置き換えは行なわれていない、と言うことである。既にAにおいて見たように、最明寺本との一致率の方が二九・三％と遙かに高いことから、片仮名を用いているが、漢文の書き下し文そのものと言ってよく、文学作品として評価に値するような本文にはなりえていないと判断される。

五

『源氏物語』の注釈書である四辻善成の『河海抄』（一三六七以前）、第十二「梅枝」には「江談云」として

源信僧都又勤此事（＝法華ハ講）説云、日本国者誠雖　如来金言　唯以　仮名　可　奉　書也。

と記す。つまり、法華経のような権威ある経典は、漢文訓読のできる少数の限られた人々だけを対象とするのではなく、それこそ「道俗貴賤」の人々に解る仮名を使って、更に言うなれば簡単な和文語に置き換えて書き写されるべきだと言う。後世、仮名書きや絵を伴う伝本が多数出現するのも、恐らくそのためであろう。(9)

『往生要集』だけでなく、『三宝絵詞』『今昔物語集』『日本往生極楽記』など、平安時代には、漢文もしくは「文章全体が漢文の出典を（内容上又は形式上）背景とした」(10)文学作品を、平仮名や片仮名で書写することは多々あったようである。だが、元の漢文や漢文の書き下し文を平仮名や片仮名を使って書き換えただけでは、表記上、異なる形態の写本が出来上がるだけであって、文体の変容とは無関係と言わざるをえない。それは、本稿で明らかにした通りである。

一体に、音声言語による文学が、口承的に逐次その内容を改めることがあるように、漢文体をその文体基調としながらも、漢語を和文語に置き換えたり、日常的な口語や俗語を加え、あるいは和文体特有の表現効果やレトリックを対峙させたりすることによって、初めて和漢雅俗のよく調和した、新しい文体の一つの文学作品が再生されるのである。そういう点では、京都浄福寺本『往生要集』の本文がその示唆を与えるものと思われる。

注

(1)築島裕・坂詰力治・後藤剛『最明寺本往生要集　影印篇』昭六三、『最明寺本往生要集　譯文篇』平四。

(2)鈴木一男『初期点本論攷』昭五四。

(3)勝山幸人（代表）「西南院本往生要集について―本文並びに語彙総索引―」（『静大国文』別巻第一号）平一二。

(4)西崎亨『高野山西南院蔵『往生要集』断簡』昭六一。

(5)西田直樹・西田直敏『浄福寺本仮名書き往生要集　影印・翻刻・解説』平六。

(6)石田瑞麿『岩波日本思想大系　源信』昭四五。

(7)財津永次「西南院蔵往生要集断簡」（『仏教芸術』57）昭四〇。

(8)注(5)文献、七四〇頁。

(9)西田直樹『仮名書き絵入り往生要集　研究・翻刻・影印』平一二。及び注(5)文献、七四〇頁。

(10)築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』昭三八、七八一頁。